

# 『攻玉社百五十年史』 『攻玉社人物誌』の 購入を希望される皆様へ



攻玉社学園では創立150周年を記念して『攻玉社百五十年史』と『攻玉社人物誌』をセットにして出版いたしました。

つきましては、このセットの購入を希望される皆様に、次の通り販売いたしますので、ご案内します。

## 1. 学校の窓口で直接購入される場合（お持ち帰りする場合）

- (1) 手続…窓口（中学・高等学校事務室）にてお申し付け下さい。
- (2) 代金…1セット2,000円（税込）

## 2. 郵送にて購入される場合

- (1) 手続…窓口（中学・高等学校事務室）に、下記の払込取扱票の送付をお申し付け下さい。

払込取扱票により、申込内容と送金額を確認した後、記載されたご住所・お名前宛てに申込内容のセットを郵送します。

※お急ぎの方は、郵便局にある一般用（白紙）の払込取扱票に、見本にある必要事項を記載の上、直接お申し込みすることもできます。

- (2) 代金…1セット2,500円（送料・税込）

【お問い合わせ先】攻玉社中学・高等学校事務室

〒141-0031 東京都品川区西五反田5-14-2 電話 03-3493-0331（代表）

払 込 取 扱 票										
00	口座記号		口座番号		金額					千 百 十 万 千 百 十 円
0	0	1	6	0	6	4	1	5	0	0
加入者名	学校法人攻玉社学園				料金	備考				
通信欄	* 攻玉社百五十年史・攻玉社人物誌 購入申込書(郵送お届け用) 2,500円 × _____部 = _____円 * 卒業生の方は、出身校に○を付け、卒業年月をご記入ください。 中学・高校・商業・短大・専門・その他( ) 昭・平 年 月卒業									
依頼人	おとこ				おなまえ		様		附 印	
(ご連絡先電話番号) _____										
裏面の注意事項をお読みください。(ゆうちょ銀行) これより下部には何も記入しないでください。										

見本

振替払込請求書兼受領証										
00	口座記号		口座番号		金額					千 百 十 万 千 百 十 円
0	0	1	6	0	6	4	1	5	0	0
加入者名	学校法人攻玉社学園				料金	備考				
依頼人	様				日 附 印		料 金		円	
備考										

この受領証は、大切に保管してください。

# 『攻玉社百五十年史』 目次

## 目次

題字	増子 亨
序	増子 亨
<b>近藤真琴と創立時代</b> ..... 1	
真琴の生い立ち 4 / その師 6 / 四谷坂町の時代 8	
築地の時代 10 / 新銭座へ 12 / 新銭座のはじめの頃 14	
塾則 (抄) 16	
<b>攻玉塾から攻玉社へ</b> ..... 17	
幼年科 20 / 女子科 22 / 航海測量習練所・商船費 24	
鳥羽商船費 26 / 陸地測量習練所・量地費 28 / 校地・校舎 30	
入社 32 / 授業 34 / 試験・卒業 36 / 教科書 38	
教師 40 / 真琴の死 42 / 国語学者としての真琴 44	
数学者としての真琴 46 / 遺墨 48	
<b>中学校と工学校</b> ..... 51	
海軍中学校 54 / 中学校 56 / 専修数学科 58	
土木科 60 / 工学校 62 / 海軍と攻玉社 64	
寄宿舎生活と気風 66 / 体育会 68 / 工学校同窓会 70	
<b>不動ヶ丘へ</b> ..... 73	
財団法人の設立 76 / 高等工学校 78 / 関東大震災 80	
移転 82 / 基樹の死 84 / 昭和初期の中学校 86	
商業学校 88 / 工学校の変遷 90 / 校友会 92 / 事変下 94	
戦争中・震災 96	
<b>戦後の復興と改革</b> ..... 99	
学制改革 102 / 校舎の再建と充実 104 / 中学校・高等学校の発足 106	
短期大学の発足と学生生活 108 / 工業高等学校の変遷 110	
商業高等学校の変遷 112	

## 本文 (抜粋)

近藤真琴が江戸四谷坂町に蘭学塾を創立したのは文久3年(1863)のことである。真琴は鳥羽藩士であったが江戸で生まれ、そこで移りゆく幕末の世相、世界の波に洗われる日本の動きを親しく見聞しながら成長した。初め母より学問の手ほどきを受け、やや長じてからは小林玄兵衛・林説之助らから和漢の学を受けた。後に藩校に入るとともに校主小浜樸介、続いて堀池柳外にそれぞれ和漢の学を授けられている。軽輩の出身であり、母一人子一人の真琴が、封建制度末期の動乱の中に、新しい時代、新しい日本を夢見たであろうことは想像に難くない。しかし多くの青年のごとく血気に任せて政争に走ることなく、従来にもまして学問に心を傾けたのであった。

「近藤翁略伝」に「米船屢々浦賀ニ神奈川ニ至ルニ及テ意ヲ決シテ蘭学ニ志ス」とある。嘉永6年(1853)ペリーが渡来して国書を提し、彼の弾圧に屈して神奈川条約を結んだのがその翌年である。国防の強化が叫ばれる一方、幕府・諸藩とも蘭学研究に格段の力を入れ始めた。真琴が「意ヲ決シ」たのはまさにこのような国の動きの中においてであった。高松讓庵、続いて村田蔵六に師事して蘭学に精進した真琴は、この間に鳥羽藩より蘭学方兼世子侍読を命ぜられている。

文久2年(1862)、真琴は藩命により、藩士に対する蘭学教授のため初めて鳥羽に向かった。在国わずか1年のことであったが、九鬼嘉隆・河村瑞賢以来海運伝統の地にあって、日夜大洋を望み、深く国の将来に思いを馳せ、自ら期するところがあったものと思われる。既に外国軍艦は日本の沿岸の測量などを始めていたが、幕府はこれを禁止して自らの手で尾張・伊勢・志摩の海岸を測量することに決し、ちょうどこの年に鳥羽沿岸の測量を開始していた。真琴はつぶさにその動きを観察し、測量に従事していた旧友岩橋教章とも語り、航海術・測量術を学ぶ決心をかためた。藩主に願ひ出て江戸に戻ると、矢田堀塾に入り、矢田堀景蔵、荒井郁之助に師事し、さらに幕府の軍艦操練所で蘭式航海測量を学び、軍艦操練所翻訳方となり、測量学教授補助と

## 新たな航海へ

六年一貫教育の創始 118 / 一貫教育の展開 120 / 校地・校舎の拡充 122  
 校祖の顕彰と周年式典 124 / 短期大学の変遷 126 / 専門学校の変遷 128  
 一貫教育の充実 130 / 本館(1号館)の竣工と校舎の改修 132  
 中学校・高等学校の学友会活動 134 / PTA、まこと会、後援会 136  
 攻玉社同窓会 138 / 玉工同窓会 140  
 創立150周年を迎えて 142

## 史料編

校地・校舎の変遷 146 / 攻玉社学校系統図 148 / 卒業生数 150  
 著名出身者 154 / 歴代社長・理事長・学長・校長 156  
 歴代理事・監事 157 / 歴代評議員 158 / 開学から大正時代の旧教職員 160  
 旧専任教職員 162

## 現況

校歌・校訓・校旗 172 / 設置課程・教育方針 173  
 中学校学則 174 / 高等学校学則 178 / 中学校入学試験状況 182  
 学級編成と在籍者数 183 / 年間主要学校行事 184  
 大学入学試験合格者数 186 / 現施設(校地・校舎) 188  
 教職員数 189 / 現役員・教職員 190

## 年表

## 主要参考文献

## 編集後記

なった。同時に、矢田堀塾や軍艦操練所の同業の中で、蘭語にくわしくない者が、四谷坂町の真琴宅を訪ねて教を請うことが多くなり、いつとなく塾の形を取るようになった。真琴はこの時期を「文久三年春夏の交」と記している。度々の火災で開塾当時の状況を知ることから、資料を欠いているが、真琴の学徳を慕う人々が自然に集まって塾が開かれたことに、私学攻玉社誕生の意義がある。

明治元年(1868)藩主に従って再び鳥羽に向かい、翌明治2年兵部省の召しによって上京した。この間、外交上の必要から英語が熱心に学ばれるようになると、既に蘭語の原書2冊を翻訳してかなり蘭学に自信をもっていた真琴は、さらに英語の研究を志した。蘭語の素養があったうえでの学習とはいえ、わずかに竹原某・グラントに手ほどきを受けた以外は特に有名な師についたわけでもなく「英蘭対訳辞書」などを使用しての自学自習であった。

当初塾名は「為錯」であり、後に「攻玉」としている。「為錯」というのも「攻玉」というのも意義は一つであり、進んで広く世界の知識を吸収し、これをわが血肉としようという真琴の決意の表われである。塾舎は明治2年11月には築地海軍操練所内の官宅、さらに明治4年4月に芝新銭座の慶應義塾跡へと移転している。

攻玉塾の状況が史料的に明らかになるのは明治4年以降のことである。この年に東京府が実施した私塾調査の結果によれば、攻玉塾は航海・測量術・和・漢・英・蘭・数学を教授科目とし「教師数男一名、生徒数男六十名」であった。さらに明治5年に頒布された「学制」に従い、攻玉塾より東京府に提出したいわゆる「開学願書」によると、塾主は近藤真琴であり、教員として前田亨・白藤道恕・寺野元良など24名がその履歴とともに記載されている。生徒数については開塾当初は「私塾取設塾生四・五人同居」の状態であったが、やがて「手狭且窮屈」のために兄弟校有隣塾が生まれ、さらに明治5年には6歳以上20歳前後の者を合わせて121名の多きを数えるようになった。

# 『攻玉社人物誌』 目次

## 目次

題字	増子 亨
序	増子 亨
<b>創立者 近藤真琴</b> .....	1
近藤真琴を生んだ時代と家庭 3 / 漢学から蘭学へ 3	
維新激動 5 / 攻玉社の発展 6 / 博学多才な活動ぶり 8	
<b>出身者</b> .....	11
<b>《海軍軍人》</b>	
<b>広瀬武夫</b> .....	12
勤王の志士の家に生まれる 12 / 攻玉社から海軍兵学校へ 13	
ロシアへの留学 15 / 日露戦争と旅順港閉塞作戦 18	
<b>佐久間勉</b> .....	20
刻苦勉勵の少年時代 21 / あこがれの海軍生活とあいつぐ不幸 23	
6号艇の悲劇 25 / 感動を巻き起こした遺書 28	
<b>《政治家》</b>	
<b>鈴木貫太郎</b> .....	30
維新混乱期の少年時代 30 / あこがれの海軍軍人へ 31	
日露開戦へ向けて 33 / 想定外の役職へ 34	
敗戦処理内閣を主宰 35 / 一介の軍人が見せた人間性 37	
<b>中馬馨</b> .....	39
開明的な父 39 / 病に打ち克つ 40	
大阪市幹部から注目される 41 / 新天地大阪での活躍 42	
ついに雪辱を果たす 45 / 任期半ばで倒れる 47	
<b>三田勝茂</b> .....	95
戦争に翻弄された学生時代 95 / 日立製作所に入社、そして飛躍 97	
重電部門からコンピュータ部門に転身 99	
コンピュータ部門を日立の柱に育てる 100	
<b>《芸術・文芸》</b>	
<b>吉井勇</b> .....	104
維新の功臣の家に生まれて 104 / 歌人への道を歩み始める 106	
結婚生活の破滅と隠遁 109 / 京都に移り生活の平安を得る 110	
<b>本多猪四郎</b> .....	113
映画への目覚め 113 / 攻玉社中学に入学 114	
映画人の道へ 115 / 撮影現場と戦場の往復 117	
“名優”ゴジラ誕生 119 / 怪獣映画の定番監督へ 120	
<b>石原吉郎</b> .....	122
文学に目覚めた攻玉社時代 122 / 満州で諜報活動に従事 124	
シベリア抑留と極限体験 126 / 詩人としての再生 128	
<b>付 攻玉社学校系統図</b> .....	132
<b>主要参考文献</b> 134	

## 《学術・技術》

<b>近藤基樹</b> .....	49
激動の世に生を受けて 49 / 海と軍艦へのあこがれ 51	
先進の造船技術導入へ 52	
大型軍艦国産化へのチャレンジ 55 / 攻玉社の法人化を実現 57	
<b>飯田清太</b> .....	58
野心を抱いて 58 / 世紀の大事業、丹那トンネル開削に従事 60	
トンネル崩壊事故発生 61 / 難航する救出作業 62	
その後の清太 65	
<b>櫻井欽一</b> .....	67
鳥料理屋の若旦那に生まれて 67 / 鉱物への目覚め 68	
思わぬことから攻玉社に入学 70	
下町の料理店の主人と鉱物研究家の二足のわらじ 71	
櫻井標本室の完成 72 / よき“アマチャ”精神の体現者 73	
幅広い教養人・趣味人として 74	
<b>《実業》</b>	
<b>松方幸次郎</b> .....	76
攻玉社入社の謎 76 / 偉大なる父 77	
川崎造船所社長として 79 / 経営破綻への道 81	
日本における西洋美術のパトロン 82	
コレクションと幸次郎のその後 83	
<b>千野宣時</b> .....	86
東北の漁師町で過ごした少年時代 86 / 東京での生活がスタート 87	
大和証券に入社 89 / 「国際部門に強い大和」ブランド確立へ 91	